



裏土御門
陰（おん）の長者
幕末動乱編

連載第1回～第5回

虹岡 思惟造

序章

嘉永3年（1850年）卯月。洛中の神社仏閣、公家屋敷などの桜は妍を競うかのように咲きこぼれ、京の都は今まさに春たけなわであった。

そんな昼下がりの都大路に大勢の人が詰めかけて京雀さながらに騒がしく話し合っている。御所を退出する噂の貴公子を一目見ようとする人の群れであった。



「ほんまですか？ 今光源氏と言われへんのは」

商人風の男が、疑わしげに仲間の男に問いかけている。

「ほんまも、ほんま、ようすぐこの前を通り過ぎるさかいに、自分の目えで確り見届けよし」と答える男は自分のことのように自慢げである。

「そうどっか、そんならそないしますわ、それにしても仰山の人だかりどすな」

男たちに負けじと声を張り上げているのは、西陣辺りから繰り出してきたらしい町屋の女房達の一団である。

「あれみと一み、向こうの角を曲がってうちにやって来はるわ」

「遠くてよう見えへんやけど、お目当ての公達に間違おへんか？」

「間違いへんわ、轡取りの大（いかい）な男（おとこし）がいやはるから、あのお方様に違いあらへん」

「ああ！ あれが今弁慶と噂しはる男（おとこし）なん？」

黒毛の逞しい馬の背に揺られながらゆったりと歩みを寄せて来るのは、衣冠姿の若い公達であった。縹（はなだ）色の袍に紫の指貫、黒の冠姿が凛々しい。切れ長の目に涼やかな眉、形の程良い顎の線などその容色は噂に違わぬ貴公子ぶりである。築地塀の外に伸びた桜の枝からこぼれ落ちた花びらが、薄青色の袍にかかる様は、平安絵巻そのものであった。

一方、轡取りの男は、髭面の六尺ゆたかな大男で、白の狩衣姿に風折烏帽子を戴き大太刀を腰に下げている。馬上の花のような貴公子と、轡取りの無骨な大男の組み合わせの妙が見物人のどよめきを誘う。

馬上の人は当年17歳、六位蔵人として先月より帝の側近くに出仕している安倍晟仁である。土御門安倍家の傍流で下級貴族でありながら、父の後を継ぐ形で六位蔵人に召されたのである。今日は宿直明けで昼下がりの御所退出であるが、その姿の美しさ、凛々しさが京中の噂となって、この黒山の人だかりとなっていたのであった。

第一章 安倍屋敷

深夜、ただならぬ叫び声が下京の安倍屋敷中に響き渡った。自分の部屋で寝ていた掬磨は度重なる叫び声に眼を覚まされた。深夜と言うのに家中の人が起き出してざわめく気配がある。そんな屋敷の異様な様子にじっとしていられず、掬磨は臥所を抜け出すと廊下に出た。掬磨はこの家の二男であり、まだ10歳の少年である。

心を凍らせるような叫び声がまたあがった。それは兄、晟仁の部屋の方から聞こえた。晟仁の部屋に向かう何人かの手燭の明かりも垣間見える。兄の身に何か起こったに違いない。そう思い至ると掬磨は兄のことが気になり、様子を聞こうと母の寝所に向かった。

母の部屋の前に来た。室内には明かりが灯されており、人の動く気配と囁き声がする。掬磨は障子を少し開けて中を覗き見た。室内には母とお付きの女房がいて互いに手を取り合っている。どうやら二人とも泣いているようであった。掬磨は障子を開け中に入った。

「おお、掬磨か、うちにおいない」

母は女房の手を離すと涙を拭ぐい、掬磨を手招いた。

「母（かか）さま、何が起きたのやろか、恐ろしげな声がいたしまする」

歩み寄った掬磨を母は抱き締めると耳元で囁いた。

「あんたは心配しはることあらへん、どもない、どもないえ」

自分に言い聞かせるように「どもない、どもない」と何度も繰り返し、掬磨の頭を撫でさすった。その時またもや叫び声がして、母は思わず掬磨の頭から手を離し両手で耳を塞いだ。

「兄（あに）さんの部屋の方から声が聞こえまする。兄さんはほんまにどもないやろか？」

「ああ、どもない、どもない、父（とと）様がおるさかい大事おへん」

掬磨の父、安倍晟義は御所勤めこそ嫡男の晟仁に譲ったものの、まだ家督を譲ってはおらず、裏土御門安倍家の当主であることには変わりなかった。裏土御門家は安倍家の傍流として下級公家の家格ではあるが、呪術・占術において安倍家直系の表土御門家より優れているとして、先祖代々、帝の近くに仕える家柄であった。当代の晟義もまた陰陽道の類まれなる術者として、公家や大名などの間でつとに知られた人物であり、このような異変時には誰よりも頼りになる存在であった。

兄の部屋の方角がやにわに騒がしくなり、人が暴れて調度の品々が壊れるような物音がした。厳しい声色で指図する父の声も聞こえてくる。掬磨は我慢できなくなり、母の手を振りほどく様にして廊下に飛び出した。慌てて女房が追いかけて来るが、お構いなしに兄の部屋に向けて駆けだした。

兄の部屋の前の廊下では、暴れる男を、数人がかりで取り押さえようとしている最中であった。暴れる男の叫び声と取り押さえようとする者たちの「暴れんでおくれやす」「どうかお静まり下を！」など必死の声が響く。部屋には明かりが灯されておらず、辺りは闇の中であり、蠢く男達の姿は黒いシルエットとしてしか見る事が出来なかったが、ちょうどその時、雲に隠れていた月が雲間から現れて、暴れる男の顔を照らした。

それは恐怖に引き攀った兄の顔であった。花の貴公子と謳われた兄が、青い月光に照らされて狂気の形相で喚き散らしている。



「吉蔵はおらぬか？ 吉蔵はどこや」

特徴のあるだみ声は家宰の葛城のもののようなのだ。

「ここに居てまする」

庭に蹲っていた大きな影が答えた。

「構へん、廊下に上がって晟仁様を取り押さえよ」

大きな影は廊下に飛び上がると、数人がかりでも取り押さえられなかった晟仁を、難なく一人で身動きできないようにしてしまった。晟仁は暴れ回るのに疲れ果てたのか、それとも抵抗することを諦めたのか、急にぐったりとして声を上げることも無くなった。

「よし、そのまんま蔵に押し込めよ」

月が雲に隠れて闇が戻った中を、黒いシルエットの一団は蔵のある方に向かって歩み去った。

掬磨は追いかけて来た母のお付きの女房に連れられて自分の部屋に戻り、臥所に横たわった。しかし寝つける訳もなく悪夢のような出来事をあれこれ考えていると衣擦れの音がして、障子が開いた。入って来たのは母と手燭を手にした女房であった。起き上がろうとする掬磨を、そのまま寝ているように母は言い枕元に座った。手燭の灯りに照らされた母の顔は陰影が濃く、表情は定かではなかったが、憔悴し切った様子であった。掬磨は夜具から手を出して母の方に差し伸べた。母は両手で掬磨の手を掬い取り強く握り締めた。

「掬磨、ようお聞き、あんたは陰（おん）の長者を継いだらあかんえ」

思い詰めたような母の声色であった。

「陰の長者って何やろか？」

「今は分からなくてもええ、陰の長者を継いではならへんと言うことだけをよう憶えておきよし、ええな」

母の言うことは良く分からなかったが、母に心配をかけさせまいとの思いで答えた。

「憶えておくさかい、母様」

「きっとや、きっと約束や」

母に手を握られて掬磨はいつの間にか深い眠りについた。

翌日、掬磨は兄が閉じ込められたと思われる蔵の様子を見に出かけた。しかし蔵の周囲には人が配されており近付くことが出来なかった。安倍屋敷全体に重苦しい気配が立ちこめ、誰もが言

葉少なく、交わす声は密やかである。

そんな日が幾日か続いた後、掬磨は呼び出されて父の部屋に行った。部屋の中央で脇息に凭れている人物は、一瞬誰かと疑うほどげっそりと痩せこけていた。

「もそっと側におじゃれ」

弱々しいがしわがれた声は何時もの父のものであった。掬磨は緊張しつつも、父の側近くに進み、座るとじっと父の顔を見つめた。

「ええか、心して聞くのじゃぞ……そなたの兄はゆんべ亡（のう）なった」

あまり物に動じない掬磨も流石に驚いて身を固くした。

「せやさかい、今日からおまえが当家の総領や」

刺すような眼で掬磨を見据えて言い聞かせる。

「お前はおぼこい頃より、物怖じしいひん強い子じゃったが、これからは今までも増して強い心を持たねばならぬ。心やさしくては、陰の長者になれへんのじゃ」

陰の長者という言葉は前に母から聞いた。今また父からその言葉を聞くことになった掬磨は問いかけた。

「父（とと）さま、陰の長者とは何やろか？」

「それは後々教えてとらすが、今は知らんやてよろし。それより、これよりは厳しく躰けるさかい覚悟せい」

ただならぬ父の気迫に掬磨は大きく頷いた。

「晟仁とおんなじ轍を踏まへんようにせんがためじゃ、おまえならきつと耐えることができるやろう……今日はこれまでじゃ、下がってよろし」

得心が行かないながらも辞儀をして掬磨は父の部屋を後にした。

掬磨は父が年老いてから生まれた子であり、父は掬磨をまるで孫のように可愛がって育んだ。母はもちろん、歳の離れた兄も、さらには屋敷中の者が愛くるしい掬磨を慈しみ優しく接した。男子でありながら“蝶よ花よ”と育てられてきたのは、総領息子ではないという背景もあってのことだったので、兄の死で事情が一変した。

先ず衣装が改められた。今まで母は、掬磨に公家の姫が着るような上質の衣装を着せていたのだが、父の指示により男子それも武家風の質素な衣装に着替えさせられた。お側の者も従来、乳母や女中と女ばかりであったのだが、あの大男の吉蔵が付き人として側に加えられた。そして学問の学習の他に、武術の鍛錬が日課として課せられたのである。このような厳しい修業は、兄の晟仁にも施されなかったとは、後になって吉蔵が教えてくれた事だが、父の掬磨に対する厳しい教育方針は揺るぎないものであった。

これまで女の子のように、はんなりと育てられた掬磨が、厳しい修業の明け暮れの毎日に耐えられるか周囲の者は皆危惧したが、意外や掬磨は弱音を吐くこと無く、勉学と武術の修練に励んだ。特に剣道には熱心に取り組み、師匠に才能があると言わしめるほどであった。

一年が過ぎ去り、兄の喪があけた或る日、掬磨は父に伴われて、先祖を祀る御霊屋に赴いた。

御霊屋は白木造り檜皮葺の屋根、小振りな神社のような建物で、安倍屋敷の鬼門にあたる場所にあった。御霊屋にはこの屋敷の当主と、特に許された者以外は入ることを禁じられており、父と掬麿の二人だけが御霊屋の階を上がり扉の前に立っている。

父が何やら呪文を唱えた。するとぼうっと白く霞むものが二つ、父の足元に現れた。その白く霞むものは次第に色濃くなり形となって目に見える様になった。それは水干姿の童子であり、左側の者は額に二本の角があり、右側の者の唇から小さな牙が左右にそれぞれ飛び出している。二人の異形の者は跪き、指示を待つかのように父を仰ぎ見ている。

「扉を開けよ」

異形な二人が膝行して扉に取り付き、左右に押し開く。

「牛麻呂はここで警護をせよ、犬麻呂は一緒に中に入れ」

父は掬麿を促して御霊屋の室内に入った。異形な者のうち、一緒に入って来たのは牙を生やした者なのでこれが犬麻呂であろう。外に残った角のある者が牛麻呂ということになる。牛麻呂が扉を閉めると部屋は真っ暗になった。

「どうじゃ、怖いか」

「いえ、父上がおられるさかいに怖い事はありません」

「ふむ、ほうか……明かりを灯せ」

犬麻呂が部屋に置かれた蜀台や蠟燭に次々に点火して行く。幾つもの灯りに照らされた部屋は明るくなり、室内の様子が見て取れるようになった。正面には階段状の祭壇が有り、霊璽がずらりと立ち並び、最上段には一際大きな霊璽が安置されている。左手の壁面には白虎、右側の壁面には青龍が描かれ、天井を見上げると朱雀が大きく羽根を広げていた。

「ここに祀られておるのは皆んなご先祖様の御霊での、最上段の霊璽は裏土御門の始祖であらせられる安倍晴明公のもんじゃ」

父は手を合わせ祈祷の言葉を述べ、深々と頭を下げて礼拝した。掬麿もそれに習って頭を下げる。

「壁と天井に描かれておるのは、青龍、白虎、朱雀、玄武の四神獣じゃ。ほんで足元の床に描かれておるのはお前もよう知っておるやろう、五芒星、晴明紋じゃ」

言われて足元を見ると大きな円の中に見慣れた当家の星型の家紋が描かれている。

「玄武がどこかてありませぬ」

改めて周囲の壁と天井を眺めまわしていた掬麿が、疑問を父に投げかけた。

「うむ、裏土御門家にとって最も重要な神獣は玄武じゃ、どれとくと見せようほどについておじやれ」

父はそう言うと、祭壇の裏手に掬麿を誘った。祭壇の裏側は蜀台の灯りが届かずに暗い陰影の中にある。

「犬麻呂、蜀台をこれにもて」

灯りに浮かび上がったのは、亀に蛇が絡みついたような奇妙なもので、祭壇の後ろの壁一面に描かれている。

「これが玄武じゃ、北天にあって山を司る神、ほんでええか、この玄武こそが裏土御門家の守護

神獣なのじゃ」

掬磨は何かに取り憑かれたように玄武を凝視していたが「もうええじゃろう」と言う父の言葉に我に返った。

「ところで、お前には式神が見えるようじゃの」

祭壇の前に戻り、円坐に座った父が掬磨に訊ねた。

「はい、見えまする」

最近の掬磨はなるべく、当時の標準語である武家言葉を話すよう躰けられており、言葉がぎくしゃくするのはそのせいである。

「うむ、安倍の血筋の者であれば式神が見えるのはさして不思議ではおへん。しかし式神が怖くはあらへんか？」

「いえ、幼い頃より慣れ親しんでおりますれば、怖くなどありません」

「なんじゃと、おぼこい頃より慣れ親しんでいたとな？」

「はい、父上の後を追ってよう御霊屋にまいりましたが、父上がお勤めを済ませて出てくるまで、扉の前で待機したはる式神と何時も遊んで待っております」

「ふーむ、そないなことをしておったのか....これ犬麻呂、警護もようせんで掬磨と遊んでいたとは不埒な奴め」

「そうはおっしゃられても、あのように愛らしい若君に誘われて、遊び相手をしない者などおりましようや」

犬麻呂はめげず臆せず言上する。式神はただ言われるがまま役目を執行する存在ではないようだ。

「まあよいわ、すると掬磨、おまえは犬麻呂と牛麻呂とすでに旧知の仲と言うわけじゃな」

「よう遊んでもろうた仲にございます」

掬磨の言葉に犬麻呂が大きく頷く。父はしばし物思いに耽るようであったが、思い定めたように口を開いた。

「ふーむ、今日はええことを聞かされたわ。お前ならきっと陰の長者を引き継ぐことが出けるやろう」

父は満足げに呟くと円坐から立ち上がった。

第二章 旅立ち

兄の死から三年経過した嘉永六年（1853年）、ペリー提督率いるアメリカの艦隊、いわゆる黒船が日本に来航した。これを機に、鎖国、開国をめぐる議論が沸騰し、尊王攘夷論が湧き起ることとなった。このとき掬磨は十三歳であったが、幕末動乱の到来を予感した父の晟義は掬磨を剣術修行のため十津川郷に遣ることにした。親元に置いておくと、どうしても周囲の者が掬磨を大事に扱うことになるので、遠く離れた十津川に行かせることを決意したのだ。

ところで十津川郷であるが、この地域一帯は古来より朝廷との関係が深く、勤皇に熱心な土地柄であった。十津川郷は南大和の山中にあり、米の収穫もままならない貧しい寒村の集合体であったが、はるか昔から朝廷に仕えており、壬申の乱（西暦672年）や平治の乱（西暦1160年）にも出兵した。また南北朝時代（西暦1336年～1392年）は南朝のために尽くしている。そのような勤皇の働きにより、江戸時代においても免租され、村民は郷士として名字帯刀を許されていた。また五條代官所の支配下にある幕府直轄領（天領）との位置付けであったが、実質的な自治が認められるなど、他に類例のない特別な地域であった。また十津川郷士には武術に励む者が多く、郷内五十九カ村には小規模ながら剣術道場が幾つもあったのである。

このような十津川郷に対し裏土御門安倍家は、先祖代々金銭的な支援や京都における宿舎提供など行ってきており、いわば十津川郷士のパトロン的な存在であった。このような支援が行えたのは、呪詛祓いや祈祷などで得た高額報酬を、先祖代々蓄えていたからに他ならない。その為、多くの十津川郷士が安倍屋敷に出入りしていたが、その中に将来の十津川郷を背負うであろうと評される上楯主税がいた。

上楯は十津川野尻村生まれの29歳、紀州にて医学を修め十津川で医師として過ごしていたが、黒船来航後時勢に目覚め、足しげく京都に上ってきては安倍屋敷に逗留していたのである。父の晟義はそんな上楯に眼をつけ、掬磨の十津川までの道案内を依頼したのであった。また旅の供としては下僕の身分から引き上げられて公家侍となった、神崎吉蔵が付き従うことになった。

旅立ち当日の早暁、若侍風の旅装を整えた掬磨は上楯、神崎と共に父と母が待つ座敷に出向き、出立の挨拶をした。父の隣に控えていた母はこの時何にも言わず掬磨の言上を聞くばかりであった。しかし玄関まで見送りに出てきた時の母は、さすがに堪え切れなくなったのであろう、涙して別れを惜しみ、上楯と神崎に掬磨のことをくれぐれもよろしくと頼み込むのであった。

ようやく明るみだした下京安倍屋敷の門前には、家宰の葛城を筆頭に家臣下僕が勢ぞろいして掬磨たちを見送った。兄のあの不幸な事件以降、急に老けこみ涙もろくなった葛城は、上楯と吉蔵に旅の注意を与えながらも溢れる涙を抑え切れぬ様子である。

「あんさんは、めっぽうお神酒が好きと聞いているけどな、今度の旅やけは程々にしておいてや。飲み過ぎて我を忘れるような事して貰うては往生するさかい」とは上楯に向けて「ほんで、お前は大的な好きやが、ええか、宿場でうつつを抜かしてはならぬぞ、何時いかなる時も確り掬磨様をお守りしはるのじゃ、それがお前の務めや」とは神崎に向けての言である。真面目腐っ

て言う葛城の様子に、周囲の者は思わず笑い声をあげる。掬麿は明るい笑顔で、上梶と神崎は苦笑の態で、深く辞儀をすると皆に背を向け旅の第一歩を踏み出した。

京より十津川までその距離およそ35里（140キロ）、その行程は先ず伏見から宇治に出て、宇治からは大和街道を歩き奈良に至る。奈良から先は下街道を使って五條に向かい、更に西熊野街道の峻険な坂道を登って十津川に至るというものであった。通常であれば5日か6日もあれば十分に十津川に行くことが出来る行程ではあった。

母やお付きの女房たちは、今回の旅と剣術修行は年若い掬麿にとって大変厳しいものとして心配したが、掬麿は窮屈な公家屋敷の暮らしから解放されて、のびのびとした気分になっていた。掬麿に気負った気分や、ましてや悲壮感など微塵もなかったのも、道案内役の上梶も、また警護役の神崎も何日かすると緊張感が次第に薄れてしまったようであった。

旅は順調に進み、四日目は五條の宿場に止宿することになった。大和五條は吉野川沿いに開けた町で、大和と紀伊を結ぶ交通の要衝として、また代官所所在町として大変な賑わいのある街であった。旅籠には春をひさぐ飯盛り女がいたし、近くには遊郭もあった。この先、五條から十津川までの間には鄙びた山間の宿しかない。繁華な宿場に泊るのは今夜が最後だという思惑があったのころだろう、上梶は旅籠に寛ぐや、酒を注文し飲み始めた。神崎は見かけに寄らず、酒はまるきり受け付けない体質のようで、風呂に入り飯を食べ終わってからというもの何やら落ちつかない。

「掬麿様、上梶はんはあの調子で朝まで飲む勢いどす。とてもやないけど付き合っただいらいれまへん。ほんでどうどすやろ、うちがおもしろいところに案内しますよって一緒に行きまへんか？」

「神崎さんと一緒に出かけるのですか？」

「ええまあ、実を申せば私一人で出かけてもええんどすけど、葛城さまから片時も掬麿様の側から離れてはならへんと厳しく言われておりますさかい、こうしてお誘いしたはる次第どす」

上梶は酒乱という訳ではないようだが、飲んだくれた大人と一緒にいるのは気が重い。それなら神崎とどこかに出かけた方が増しかもしれない。

「おもしろいところってどんなところですか？」

「そらどすな...綺麗なおなごがぎょうさんおるとこで、わくわくしはるような音曲が鳴り渡る、そら楽しいところでおます」

「ふーん、まるで極楽、浄土のようなところですね」

「ええ、まさにその通り、極楽どす」

好奇心の強い掬麿は行こうと決めた。

掬麿と吉蔵が外出するために着替えていると、隣の部屋で飲んでいた上梶が見咎めて声をかけてきた。かなり酔いが回っていて呂律が怪しい。

「こ、これ吉蔵、お前着替えなどして何処ぞに出かけるつもりか？」

酔っ払いに絡まれると面倒と思ったのか、その問いかけには答えずに「掬麿様、もう出かけてもかましませんか？」と聞き、掬麿が頷くと「そんならすぐに参りまひよ」と急ぎ立てる様にして座敷を後にした。

「あ、これ待て、どうせ良からぬ所に行くのであろう」と上梶が喚く。返事がないので更に「掬磨様！ 吉蔵と一緒に行ってはなりませんぞ」と慌てて怒鳴るが、吉蔵と掬磨はそんな上梶の叫び声を背中で聞き流して玄関に向かった。

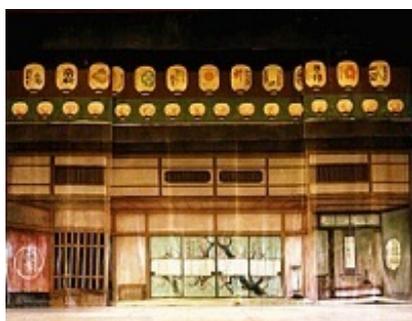
宿の外の通りは、夜だと言うのに道の両側にずらりと並んだ店の灯りで昼のような明るさである。一夜の宿を求める旅の者や歡樂客、それら呼び込む飯盛り女などがひしめき、結構の賑わいである。そんな通りをしばらく歩いて、裏通りに足を踏み入れるとそこは今までとは様子の違う一画であった。店の灯りや表格子に赤っぽい色が多く使われているのか、付近一帯がぼうっと赤く滲んで浮かび上がるかの様である。店からは三味線や笛太鼓の音が流れてくる。酔客がそぞろ歩いているが客引の姿は見えない。

「ここがそなたの言う極楽か」

辺りを見回し、好奇心にそそられて掬磨が声をあげる。

「いかにも左様で。しかしほんまの極楽は見世の中におますさかい、こちらに入っておくれやす」

夜目にも三階建と分かる立派な店構え、軒先の暖簾をかき分けて中に入る。



「よう、おこし！」すかさず声がかかる。

手代風の若い男が揉み手をしながら待ち受けている。

「わたらの見世は初めてでっしゃるか？」

「うむ、わしは始めてやけど、十津川のもんとは昵懇な仲での、ほしてこの界限で随一と言うてな、この見世を紹介されたと言う訳や」

「へえさようで、ほんま今日日（きょうび）は十津川の郷土はんがようけ京、大阪に行かれるのでわたらの見世にもようお越しいただいておりまっさ.....ええと？」

見世の男は吉蔵の後ろの掬磨に気付き不審そうな表情を浮かべた。

「あの、そっちゃんの若さんも上がるんでっか？」

「あ、いや、まだお若いよって、おなごはいらぬ。旨い料理を運んで貰い、音曲やらなんやら聴かせてくれればよろし」

「へえそうでっか、ほな手配しますよってお上がりくれへんかの」

男は二人を玄関に上げると奥に向かって大声で叫んだ。

「お二人様お上がりー！」

案内されたのは、二階の二間続きの座敷である。掬磨を高貴な身分の者と見届けたからか、あるいは吉蔵が気を利かして手代風の男に多めの心付けを握らせたからか、はたまた十津川郷土の

主だった者と昵懇の間柄と言うことからか、兎も角、裕福な上客と判断されたようだ。

掬磨は床の間の前に座ると座敷の様子を繁々と眺め回した。屏風や座敷筆筒など高価そうな調度品が配置され、隣座敷との境の欄間には、凝った細工の彫刻が施されていた。吉蔵は座るや否や「酒やらいらぬさかい旨いものをどんどん運でや」などと上機嫌で仲居の女中に命じている。

料理や菓子が次々に運び込まれる。掬磨は先ほど宿で夕食を済ませて来たのであまり食は進まなかったが、珍しそうな菓子などをつまみでは口に入れていた。吉蔵はというと、宿の食事では満足できていなかったようで、出された料理を豪快に食べていた。

しばらくして締められていた隣座敷との境の襖がするすると開いた。そこに控えていたのは鼈甲色のかんざしを沢山髪にさし、煌びやかな緞子の打掛を身にまとった女であった。その両脇には赤い着物を身に着けた少女二人が左右に侍っている。その姿を見た吉蔵は相好を崩して、手を打ち呼びかける。

「おう、これはこれはうつくし花魁のお出ましじゃ」

掬磨は吉蔵の前では、何も知らぬように装っていたが、実を言うと遊郭とは何か、花魁とはどのようなものか凡そのことは既に知っていた。この時代は総じて早熟であり、また性に対してはおおらかであったから十三歳ともなれば男女間のことについて一通りの知識を持ち合わせていて不思議ではない。また当時の公家社会の仕来りにより、すでに性の手ほどきのようなものを受けていたのである。しかし父からは「お前も十三歳となりおなごへの興味が強まる年頃であろうが、十津川に居てる間は、おなごのことは忘れて修業に集中せんとならぬ」ときつく申し渡されていた。縛られることが嫌いな掬磨であっても、父の命令ばかりは従わざるを得ない。また修業の身としてこの申し付けは当然のことと納得もしていた。

二人の禿が三味線を弾き、花魁が最近流行りだという都々逸を唄って聞かせてくれた。都々逸はこの数年、江戸からこの上方にかけ急速に広まった三味線を伴奏にして唄われる俗曲の一種である。歌の内容は男女の機微に触れたものが多く掬磨にはよく理解できないものもあったが、風刺に富んだものや、瓢げたものもあり楽しめた。

音曲の披露が終わると吉蔵は花魁に盃を与え、掬磨は禿の少女二人に菓子を振る舞って音曲の芸の見事さを褒めた。

「ほんまにかいらしい若さんどすなあ」

掬磨と吉蔵の側に座った花魁は吉蔵に背を向けて掬磨を見てばかりいる。二人の禿は掬磨の仕草や言葉に何が可笑しいのか、一々笑いこけている。一人仲間外れされたような吉蔵は不服げである。

「あーこれ、そこの禿の二人、これよりは大人の時間やさかいに引き下がってよろし」

吉蔵の言葉に禿の二人は「まあいけずやなあ」「ようちびっと居てもええでっしゃろ」などと言いまだこの座敷に居たいようである。

「これあんたたち！ お客はんのお申し付けは素直に聞くもんや」

花魁にたしなめられて、禿の二人は渋々と座敷を出て行く。

「ああそんなら、うちも宿にいのう、これより大人の時間とのことやしな」

急に眠くなってきた掬磨がそう言うと、吉蔵は大慌てで「いぬなんて、殺生どす、これよりが

楽しみの本番やのに」と今にも泣きそうな表情である。

「ほうか、そんならどないしたらええかの」

掬麿の問いかけにどう応えようかと思案する吉蔵を見て花魁が答える。

「ほんやったら、別の部屋にお床をこしらえさせるさかい、若様はそっちゃでお休みになられませ、ほんで翌朝早くに宿にお帰りになればええでっしゃろ」

「ああそれがよろし、掬麿様そないなさいませ」

「ほなそないしよか....したが吉蔵、この花魁が大層気に入ったようやが、翌朝は早いぞ、なん事もええ加減にせなあかんよ」

「へへえ、恐れ入りましたる事にござりまする」

年少の掬麿からこのような言葉を掛けられるとは思ってもいなかったのであろう。思わず平身低頭してしまう吉蔵であった。

翌朝、掬麿は何者かが呼び掛ける声に気付き目を覚ました。辺りはまだ薄暗く、行燈に明かりが灯されている。

「やっとお目覚めでどすなあ」

「おはようさんどす」

呼び掛けていたのは二人の少女であった。寝ぼけ眼をさすって、よく見るとどうやら二人は昨夜の禿の少女たちであるらしかった。昨夜は赤い着物を着て化粧までしていたが、今朝は町屋の娘のような質素な着物で化粧もしていない。気付くのに手間取る訳だ。しかし二人は花魁候補だけあって、素顔でも中々の美少女である。

二人の少女は、掬麿の訝しげな表情が可笑しいのか顔を見合わせて笑い声を洩らす。そんな二人の少女に見つめられ急に気恥ずかしい思いが湧き出した。というのも夢の中でこの二人の少女たちが掬麿の布団に入って来たことを思い出したからであった。二人の少女は、着物を脱ぐと裸で両脇に寄り添い、その手が掬麿の身体をまさぐった。今も少女の胸のふくらみの感触や首筋に受けた熱い吐息が生々しく思い出され、掬麿は身体の中心が熱く疼くのを覚えた。

『あれはほんまに夢だったのやろか』

そう疑うと、少女たちが何やら意味深な笑みを浮かべているようにも見えてくるのであった。

「まだ夜明けには間がおますけど、よう宿に帰られた方がええと思うて」

「そうどす、お連れはんはもう起きて支度しておられます」

掬麿は頭に湧き出たもろもろの妄想を打ち払うと、布団から勢いよく起き上がった。

掬麿と吉蔵は夜が明け切らぬ薄暗い内に妓楼を出て宿に戻った。その途中、吉蔵は相手を勤めたのは花魁ではなく、不細工な年増の女であったとしきりにぼやいていた。花魁がそう易々と一見（いちげん）の客を相手にしないのは常識であり、それを知らない吉蔵ではないと思うのだが、あの花魁にかなりの執心だったということであろう。

宿に着くと上相はまだ熟睡中であった。宿の者に訊ねると、案の上、明け方近くまで飲んでいたらしい。しかし何時までも寝かせて置くわけには行かない。今日は今回の旅の最大の難所の天辻

峠越えである。天候の急変など不測の事態に備え、早めに出立しておくに越したことはない。上梶を無理やり起こして、朝食を摂り、明け六つ（午前6時頃）に五條の旅籠を後にした。尤も上梶は二日酔いで食事も碌に喉に通らないようであった。

西熊野街道は別名を十津川街道とも言う。奈良から十津川を経て熊野に通じる参詣道であり、古代より多くの人々が往来してきた道であった。しかしその道は急峻であり、街道というより登山道といった趣であった。五條から天辻峠までは約5里であり平坦地なら二刻半（約五時間）もあれば行ける距離であるが、上梶の説明ではその倍はかかるとのことであった。

五条を出立してしばらくすると、一行はいよいよ山道へと差しかけた。すると、つい先ほどまで二日酔いでふらついてきた上梶が、俄かに力強い歩みをするようになった。

「先ほど飲んだ秘伝の丸薬の効用や、わしはこうみえても歴とした医者やさかいにな」
上梶は威張って言い放ち、途中の名所旧跡などがあると、掬麿と吉蔵に懇切にその由来などを語って聞かせてくれるのであった。

一行は夕七つ（午後四時頃）、漸く峠に到着した。この一刻ほどは特に急峻な登り坂でさすがに掬麿は疲れを覚えて休息したいと願わずには居られなかった。峠には小さな茶店位はあるであろうと想像していた掬麿であったが、峠に至り意外な光景に驚いた。天辻峠には百に近い数の人家が道筋に立ち並び、問屋、旅籠、茶店などがあつたのである。

「どないや、驚きはったやろ？ 峠のてっぺんにこないに仰山の人家があるんは日本広しと言えどもこの天辻峠を置いて他にありまへんぞ」

年若にも拘らず日頃冷静な掬麿が驚いた表情を見せたので、上梶はしてやったりと自慢げである。

「天辻峠は南北に十津川街道が通る他に、東西の尾根道が紀州・吉野に通じておるさかいここいら一帯の重要な物資の集散地なんや」

上梶はそう説明し、この集落一の資産家である鶴屋治兵衛宅に掬麿と吉蔵を案内した。鶴屋治兵衛は吉野と京阪間の物資の輸送、木材の売買などで財を築いた人物で尊王の志が高い事でも知られていた。京都の裏土御門家同様に十津川郷土のパトロン的な役割を担っていたのである。上梶と鶴屋治兵衛はかねてより昵懇の仲であり、今夜の宿を頼んであるとのことであった。

鶴屋治兵衛の家は、立派な店構えで問屋場らしく街道に面して建っており間口も広い。上梶が訪いを入れると番頭風の男が応対に現れ、足の濯ぎを済ませた一行を奥に案内した。庭に面した座敷に通され、出された茶を飲み終わった頃、貫禄を備えた中年の男がやって来て口上を述べた。

「当家の主、鶴屋治兵衛にござりまする。今日一日ずっときつい道のりでさぞかしお疲れのこととでっしゃろう。このような鄙びた所で何のもてなしも出来まへんが、どうかごゆるりと寛いで下さりませ」

挨拶を終えた治兵衛は上梶に向い「今晚は酒を飲みながら大いに語りましょうぞ。京都の最新の情報などもお聞かせください」と言い置いて戻って行った。

その夜は険しい道のりを歩いてきた疲れもあり、掬麿は風呂に入り食事を済ますと早々と床に

ついた。昨夜のような妖しい夢を見ることなく、朝まで目覚めることはなかった。

ところで鶴屋治兵衛とその屋敷は、幕末の歴史に思わぬ経緯で名を残すことになる。掬磨が治兵衛宅に止宿した十年後の文久三年、武力討幕の魁とされる天誅組の変が勃発する。しかし時に利あらず幕府の大軍に追いつめられた天誅組は、敗走を重ね天然の要害である天辻峠に逃れて来る。その時に助力を惜しまなかったのが鶴屋治兵衛であった。治兵衛は屋敷を天誅組の本陣として明け渡し、食糧、資材などを提供し援助に努めたのだが、多勢に無勢で戦に敗れ、本陣であったこの建物も焼き払られてしまうことになる――

第三章 十津川郷

無事に十津川郷に到着した掬磨が身を寄せたのは、郷内五十九箇村のほぼ中心に位置する折立村の前木藤右衛門の屋敷であった。その屋敷は折立の集落から少し奥まったところにあり、重畳たる山に囲まれていたが、裏手は十津川の深い渓谷で、谷底には筏を流すための溜まり場が設けられていた。周辺の山々から伐りだされた丸太を、谷底に落とし一定量が貯まったところで筏に組み、河口の新宮に流すのである。折立村は木材物流の拠点でもあった。

案内役の上相は、掬磨を送り届けるとすぐに自宅のある野尻村に行ってしまう、供の吉蔵も踵を返すように京都に帰ってしまったから、一人残された掬磨は、何をするにも勝手の違う山里暮らしに戸惑うばかりであった。



前木藤右衛門は郷内でも屈指の剣客と知られ、鏡之進という掬磨と同一歳の息子がいることから、掬磨の剣術の師匠に選ばれた人物である。前木家は代々折立村の庄屋を務める家柄で、その屋敷は質素ではあるが掬磨が寄宿するには十分な広さがあった。掬磨には奥まった一室が宛がわれ、寝起きはその部屋ですが、食事は前木家の家族と共にし、掃除や風呂の水汲み、柴刈など家事、雑事についても家族同様に行うよう申し渡されていた。これらについては事前に父からよく言い聞かされていたので覚悟していたが、食事の粗末なのはさすがに堪えた。京都の安倍家では毎食、白米が主食であったが、前木家のそれは、麦や稗などの雑穀と芋であり当初はなかなか喉に通らなかったのである。しかし厳しい剣術修行に明け暮れるようになると、そんなことに構っているどころではなくなって、出されたものは何でも食するようになる。

前木家の家族は、当主の藤右衛門とその妻のとよ、長男の鏡之進と十歳と八歳の二人の妹の五人であった。藤右衛門は剣術の指導においては厳しく掬磨に接したが、それ以外の時はしごく穏やかであり、とよも純朴な性格で何かとやさしくしてくれたので、戸惑うばかりの山里の暮らしにもやがて慣れていった。二人の幼い娘は、雅な雰囲気漂わす掬磨の立ち居振る舞いに最初は馴染めないようであったが、しばらくするとすっかり慣れ親しんで纏わりつく様にさえなった。しかし鏡之進ばかりは同一歳であり、また多感な年頃でもあったから、双方ともに、すんなりと胸襟を開くと言うわけには行かなかったのである。

鏡之進は幼い時から父である藤右衛門より剣の指導を受け、まだ十三歳でありながら早くも天稟の才能ありと郷内で噂になる程の腕前であった。剣術について強烈な自負があり、『京都の貴公子何するものぞ』という気概を持っていたのである。同じ屋敷で暮らすことになった掬磨の存在が疎ましく思えたのも無理はなかった。

ところで剣術の修業は、長きにわたり木刀を用いた型稽古で行われてきたが、幕末に至るとそ

の主流は、防具を身に着け竹刀で打ち合う方式に変わっていた。藤右衛門が免許皆伝を許された心形刀流もその例外ではなかった。江戸の四大道場の一つに数えられる心形刀流の錬武館でも竹刀と防具を用いた打ち込み稽古が行われていたのだが、藤右衛門は稽古に来る者達に昔ながらの組太刀による型稽古を課していた。それは貧しい郷土の子弟にとって竹刀、防具を揃えるのは容易でないという事情もあってのことであった。そのため時折行われた稽古試合でも木刀で相手を打ち込むことは禁じられていたのである。しかし鏢迫り合いから相手を突き飛ばすことや、柔術の技などを用いて投げ倒すことなどは許されていた。掬磨は稽古中に、体格に勝る鏡之進から体当たりを食らって吹き飛ばされたり、足を払われて倒されたりすることがしばしばであった。屋敷の平らに均された庭がその道場であったから、泥まみれ埃まみれにされてしまうのであった。鷹揚な性格の掬磨でも、このような無様な負けはさすがに悔しくて、修業に励んだ。後になって知ることになるのだが、このような経緯になることを父、晟義は最初から目論んでいたのである。

敵愾心をむき出しにして向かってくる鏡之進に負けまいと、一年も修業を続けるうちに、筋力は見違えるほどに強化され上背も伸びた。この頃になると鏡之進と試合してもそう簡単に押し負かされることはなくなった。急速に力をつけてきた掬磨を見て、折立村の郷土の間で、力技はともかく剣術では掬磨の方が鏡之進より上手だと囁く者が現れるようになった。掬磨とて十歳から剣の手ほどきを受け、その師から才能ありと評されたほどの者であったから、十津川で懸命に修業して剣の技が一段と上達したのである。この噂を聞き及んだ鏡之進は父に願い出て、掬磨と打ち合い形式の試合をする許しを乞うた。自分の方が剣術において優れていることを明確に示したかったのである。願いを聞いた藤右衛門は、思うところがあったようで、竹刀と防具を用いる方式で試合うことを許した。



その試合は早朝、屋敷の庭で藤右衛門の立ち会いの下に行われることになった。この試合のことは誰にも知らせていなかったのも、見物する者の姿はない。初夏とは言え山里の朝の空気は冷え冷えとしている。今までやかましく囁っていた雀の群れが軒先から去って行くと、辺りは急にしんと静まり返った。庭の中央では年代物の防具を身に着けた素足の二人が、藤右衛門から試合の注意を言い渡されていた。

「ええか、試合は一本勝負や、勝負ありとわしが判ずるまで休むことなく打ち合わねばならぬ。ほんで勝負の結果は素直に受け止め、決して遺恨を残したらあかん。それが誓えぬ言うやったら、この試合認めるわけにはゆかぬ。どないや、二人共わしの言うことに納得し、遺恨を残さぬと

誓うか」

「はい、誓いまする」

「わしもじゃ、父上、わしもきつと誓いまする」

二人が身に着けている防具は、藤右衛門が修業時代に使っていたもので、ところどころ綻びがあるような代物である。面と籠手を着けた二人は互いに礼をすると竹刀を中段に構えた。

「一本勝負、始め！」

藤右衛門が厳しい声音で勝負の開始を告げた。

鋭い気合を発した鏡之進が正眼の構えのまま、間合いを詰める。掬磨は無言で後じさりし剣先が触れ合う程の間合いを保つ。鏡之進は時折、気合を発しつつ、じりじりと押してくる。鏡之進の攻撃の鋭さを知る掬磨は、まともに打ち合う愚を避け、間合いを取って後退し続ける。そうこうするうちに、掬磨は庭の隅の菜園の縁まで追いつめられた。これ以上掬磨は後退できないと見た鏡之進が、竹刀を上段に振り上げた。得意技である上段からの面撃ちを仕掛けようとしたのだ。しかしその瞬間を待っていたかのように掬磨は大きく踏み込み胴を払いざま、鏡之進の脇をすり抜けた。かろうじて身をかかわした鏡之進が向き直り、今度は逆転する位置で二人は対峙した。互いにまた正眼の構えをとる。

その後も、掬磨が押し込まれる形勢に変わりはないが、鏡之進の攻撃に対し、抜き技や返し技で反撃するという攻防が続き、勝負は中々つかない。四半刻も経ったであろうか、この頃になると両者とも、汗みどろで呼吸も荒く肩で息をするほどになっていた。

「両者これまで！」

疲労困憊の極みと見た藤右衛門は試合の中止を宣した。

「両名とも井戸にて汗を流したら、わしの座敷に参れ、申し渡す儀がある」

息があがり返事をする声も出ないほど疲れ切った二人は、深々と礼をするのが精一杯であった。

身を清め、衣服を改めた二人が藤右衛門の座敷で神妙に控えている。決定的な打撃を受けなかったものの、打たれたあちこちが今になって熱を帯び痛みだした。鏡之進とて同じであろうが、身じろぎもせず正座している。しばらくすると廊下を歩く足音が近づき、藤右衛門が座敷に入って来て床の間の前に座った。二人は低頭して迎え、師匠の言葉を待つ姿勢をとった。

「今日の立ち合いは勝負がつかない。この結果でいうたら、お主たちの腕前は互角の力量ちゅうわけや。先ずは両名とも、互いの力量をば認め、いらざる敵愾心は捨てよ、よいな」

「しかと承りました。鏡之進殿の力量のほど、元より充分承知しておりまする」

掬磨に続き鏡之進が言上する。

「父上のお言葉、心に刻みまする。掬磨様の腕前がかほどに上達しておったとは、正直思いの他やったけど、その力量の程、実際に試合ってよう分かりました。また掬磨様に対し、これまで素直に向き合えんでおったこと、未熟でござりました。どないか堪忍して下さい」

純朴な鏡之進の申し状に、掬磨も率直に挨拶を返す。

「公家育ちの悪い癖で、人さまの心情を思いやるのが苦手なのです。鏡之進殿には何かと心障り

の振る舞いをしたと存じますがどうかお許し下さい」

「二人ともよう申した。これよりはいがみ合うことなく、互いに切磋琢磨して剣の道に精進せよ」

藤右衛門は満足そうに二人の顔を見比べていたが、形を改めて言葉を続けた。

「かねてより言い聞かせておるが、心形刀流においては心の修養こそが第一義や、心正しければ技正しく、心の修養足らざれば技乱れるちゅうのが流儀の根底であることを忘れてはならぬ」

藤右衛門は鏡之進がこのところ慢心気味であり、今日の試合でも相手を侮り、勝ちを急いだ心の在り様が技を鈍らせたとして、心の修業に一層励むよう諭した。掬磨に対しては、更に剣の技に磨きをかけることと、心の冷静さも大切だが、勝負にかける熱き気概もまた大切であると教えた。掬磨のものごとにこだわらない性格が、勝負の世界では思わぬ命取りになりかねないことを危惧しての師匠の言葉であった。

この試合を機に、掬磨と鏡之進はこれまでのわだかまりを捨て修業に励んだ。その成果は、十津川郷あげての一大行事である剣術大会で如実に示されることになった。村対抗試合は団体戦で行われるが、折立村が二人の活躍により、年少の部において最優秀の栄に輝いたのである。このようなこともあって、二人の仲は更に深まっていった。

この剣術大会ではもう一人その活躍が注目された者がいた。幼少の部に出場した、中井庄五郎、8歳である。庄五郎は5歳のときから藤右衛門の下に稽古に通っていたが、生まれつき毛が濃くて、稽古に集まる子供たちから「熊ん子」「ひげわらし」などと囃子立てられほど、その全身が黒い毛で被われていた。そんな風体のために、一緒に稽古する子供たちから、馬鹿にされていたが、本人は気にする風もなく熱心に稽古に通ってきた。掬磨はそんな庄五郎が好もしく思えて、よく稽古をつけてやっていたのだが、その庄五郎が剣術大会で群を抜く成績を納めたのであった。そうになると、誰もがその剣の才を認めるところとなり、からかったり、馬鹿にしたりするような者は以降なくなったのである。

この中井庄五郎、成人してから剣客として名を馳せるようになり、溥明と奇しき縁で再び係りを持つようになる。

第四章 加冠の儀

十津川での剣術修行が二年を過ぎ、心形刀流の目録が許されたのを機に、修業を終えて京都に帰るよう父からの指示があった。掬麿がもうすぐ十五歳を迎えるので、元服させることを父は考えてのことのようであった。十津川の二年間は、これまで経験したことの無い環境下での厳しい修業の日々であったので、十津川にいた時は、時間の経過がとても長く思えたが、京都の安倍屋敷に帰って振り返ってみれば、その二年間が何とも短く、また懐かしく感じられるのであった。

十五歳の誕生日を迎えて数カ月経ったところで、掬麿の元服式が執り行われることになった。元服式の内容は加冠の儀であり、童形の髪型を改め、冠親から冠を授かるという成人を祝う儀式である。元服式は公家社会でも、武家社会でも盛大に行われたが、中でも冠親の選定が重要とされていた。掬麿の冠親は、安倍本家であり陰陽寮の頭である安倍晴雄が務めることになった。誰が冠親になるかは、後々の出世にも影響すると言われるほど大切なこととされており、安倍晴雄が冠親に決まり父親の晟義も大安堵であった。しかし晴雄は、陰陽道の第一人者との自負が強く、儀式についてあれやこれやの注文や駄目だしをしてくるので、準備が何かと大変であった。それでも何とか予定の日取りまでに、すべての準備が整い、下京の裏土御門家の屋敷で元服式が執り行われることになった。

式当日、成人の髪型に結い上げ冠を頂いた掬麿の姿は如何にも凛々しく、花の貴公子と謳われた亡き兄を彷彿とさせるものがあった。元服式には親族の者を中心に多くの関係者が招かれていたが、その中に一人の少女がいて、そんな掬麿の姿を熱心に見つめていた。安倍晴雄の娘の澄姫である。澄姫の正式な名前は土御門藤子、このとき十二歳であった。父親から裏土御門家で元服式があると聞き、その様子を是非見てみたいとせがんで連れて来て貰っていたのだ。父の晴雄としては、通常であれば、そのような我儘は聞き入れないのだが、年若くして宮仕えをすることが決まった藤子を不憫に思って、特別に願いを叶えてやったのであった。

掬麿も、式の最中、見慣れぬ姫君が、じっと自分を見つめていることに、気付いていた。聡明さと、利かん気な性格を伺わせる表情が印象的な姫君であった。その時の藤子の姿形は思い掛けず、掬麿の心に深く根付くことになる。

元服を機に、掬麿は諱として溥明を授かり、六位に叙せられて蔵人見習いとして朝廷に出仕することになった。掬麿改め溥明が出仕する御所は、昨年火災焼失したものを、今年になって平安様式により再建したものであった。まだ木の香も芳しい御所の主は、第百二十一代天皇の孝明帝二十四歳である。孝明帝は大の異人嫌いで、攘夷鎖国思想の持ち主であり、頑なとも言えるその信念は、終生変わることがなかった。

ところで、溥明が御所で働く場は紫宸殿の蔵人所である。蔵人所はもともと天皇家の家政機関として、書籍や御物の管理を司る役所であったが、次第にその権限を拡大して行き、溥明が出仕した幕末においては、詔勅、上奏の伝達や、警護、事務等殿上におけるあらゆる事を取り仕切る機関となっていた。蔵人見習いは補助的な雑務処理などを命じられるのが普通であったが、裏土御門家の溥明は、占術や呪術が使えると思われていたことに加え、剣術の腕を見込まれて、帝の

身辺警護役を委ねられることになった。当時、御所の警護は、全国の雄藩に割り当てられていたのだが、これらの諸藩の兵は御所の出入り門を主に警備し、帝や公家の身辺警護を行う役割は担っていなかったたのである。

溥明の朝廷出仕と前後して、土御門藤子も御所に上がっていた。孝明帝の異母妹である和宮の乳母という役目であったが、和宮が八歳、藤子は十二歳であり、実際のところは、和宮の少し年上の遊び相手若しくは学友といった役どころであった。そのような次第で、溥明と藤子は同時期に御所に仕えていたのである。帝の側近と雖も奥向きの女官とは滅多に顔を合わすことがないのが御所の常であった。しかし、溥明は帝の身辺警護役として、女官達が詰める内裏奥にも随行したので、そんな時には藤子の姿を見かけることがあった。



女官達にとって、帝に付いて奥まで来る若い公達は目立つ存在であり、新任の若い蔵人見習いに興味津津であった。そんな女官達は、藤子が溥明と同族であること知ると、溥明のことについてあれこれ問い質すのであった。

「藤子様と、あのお方は共に安倍家のご同族であらしゃるとか」から始まって「お二人は、以前何度もお会いした仲との噂を聞き及びましたが、ほんまどすか」などの噂話に及び遂には「許嫁の間柄とか、うらやましいことどすなあ」と、話がどんどん飛躍して行く。

躍起になって打ち消す藤子であったが、周囲の女官達は宮仕えの格好の退屈しのぎとして、寄ると触ると溥明と藤子の話をするのであった。

この当時、米国を始めとする列強が開国を迫っていたが、御所の奥向きでは、それ程の切迫した空気はなく、女官達の間では他愛もない話題に打ち興ずる余裕がまだあったということであろう。

しかし、江戸幕府は、アヘン戦争で清国がイギリスに敗北したことを承知しており、列強の侵略について現実的な脅威を感じていた。老中首座となった堀田正陸など幕府の要人たちは、米国を始めとする列強の開国要求をなんとかはぐらかして先延ばしを図りつつ、その一方で、江戸に講武所、長崎に海軍伝習所を開設するなど、軍備の洋式化を急いでいたのである。

それでも、溥明と藤子が御所に仕出して数年間は、大過なく時が経過し、溥明が十八歳の時、蔵人に昇進した。六位蔵人は、亡くなった兄も任ぜられた帝側近の誉れの職位である。

その後も平穏な日々が続くかに見えたが、安政五年（1858年）、京都御所は大混乱に陥ることになる。その騒ぎは、日米通商条約締結の勅許を得ようとして、幕府老中の堀田正陸が上洛してきたことに端を発する。なおこの当時、既に日米和親条約が締結されていて、下田と函館がすでに開港され、下田にはハリスが総領事として赴任していた。強固な攘夷思想の持ち主の孝明帝であったが、薪水給与等の温情的な和親条約であれば「神国日本を汚すことにはならない」との

考えでこれを容認していた。しかし、今回の通商条約締結は異国と同等の立場で自由な通商を行うことを目的としており、従来の秩序に大きな変化をもたらすものであったから、孝明帝としては幕府の要求を到底受け入れることが出来なかったのである。このような状況下で起きたのが、廷臣八十八卿列参事件であった。

堀田老中が参内した数日後の安政五年三月十二日、御所は異常な緊張に包まれていた。勅許を阻止する為に、過激な一部の公家達が何事か企てているとの情報が飛び交っていたからである。そんな状況だったから、溥明は何時になく緊張した面持ちで、帝のお出ましになるのを内裏奥御殿の控えの間で待っていた。そんな溥明のもとに、一人の女房がやってきて文を手渡したのである。使いに来たのは藤子に仕える女房で、溥明もかねて見知った者であった。実を言えば、この数カ月来、溥明と藤子は文を交し合う仲になっていたのであった。噂が先行して、その噂に引きずられて、本当の恋に移行するという事は、今も昔もあるが、溥明と藤子の仲もまさにそのようは経緯を辿り、何時しか親しい関係となっていたのである。しかし、いくら恋仲となったからといって、今日のような日に、色恋の文を届けるような、藤子ではない。藤子が聡明な女性であることを溥明はよく承知している。何か大事が発生したに違いない。

『何事であろう』溥明は早速、封を解いて、文を読む。

その内容は、父の土御門晴雄が、勅許許可を阻止する為の参内強行計画に関与しており、そのことについて早急に相談したいというものであった。

ごく一部の過激派の公家による企てとの噂であったので、まさか晴雄が関与しているとは思ってもしなかったことであった。過激派とは言えない晴雄までもが加わるとなると、事は重大である。公家が大挙して参内を強行すると言う大事件に発展するおそれがあった。

土御門晴雄は安倍一門の総帥である。晴雄がこの企てに参加するか否かは安倍一族の命運に係る問題であった。裏土御門家の溥明としても他人事ではない。溥明は手早く返書を認めると、部屋の外で待っていた女房に手渡した。

その日の午後、帝が食事と休息のため内裏に戻るのを見計らって、溥明は藤子の部屋に出向いた。溥明と藤子の仲は、女官達のすべてが知る所であり、また内裏の主である和宮もその仲を認めていたので、少しの間であれば、御所内で会うことは大目に見られていた。

溥明が部屋に入ると、藤子がすぐに要件を切りだした

「どないしたらええんやろ？ 父君が今夜かて、同僚の公家達と御所に押し掛けると言うてはるようどす」

このところ、目に見えて女らしい色香を発するようになった藤子を、抱きしめたいという誘惑に一瞬駆られるが、溥明はそんな感情を表に出さず答える。

「その企ては、侍従の岩倉殿が中心になって画策しているようです。晴雄様以外にも、公家のほとんどが同調する勢いです」

この頃になると、企ての具体的な内容が御所中に広まっていた。どの公家も熱に浮かされたように強行参内を唱えており、その勢いは止まることを知らぬ有様という。

「帝はこの動きをご存じであらしゃりますか？」

「帝側近の公家達もその企てに揃って賛同しているので、誰も帝の耳にお入れしていないでしょう」

「溥明様のお口から、帝にお伝えして、この企てを阻止しはる訳には行きませぬか？」

「今となっては、帝と雖も公家たちの動きを阻止することは出来ないでしょう。帝の耳にお入れしても宸襟を悩ますばかりとなるに違いありません」

打つべき手立てが見つからないまま、時は瞬く間に過ぎて、溥明が帝の側に戻らねばならない時間となった。なす術はないが、藤子は溥明に相談して心が大分安らいだ。堂上公家の大部分がこの企てに加わるのであれば、もし咎められても、その全てを厳しく罰する事は出来ないであろう。そのように考えることにして、藤子は心を休めたのだ。

その夕刻、続々と御所に押し掛けた公家達の数は一十八名にも上った。正二位 中山忠能を筆頭に、五位以上の公家のほとんどが御所内で座り込みを実行し、勅許反対を唱えたのである。

このような突き上げもあって、孝明帝は益々頑なになって、条約勅許を拒み続けた。こと此処に至り、勅許を得ることを断念した堀田正陸は江戸に帰り、その責任をとって大老を辞任する。

第五章 勅使江戸下向

堀田の後を継いで大老に就任したのが、かの井伊直弼であった。井伊直弼は彦根藩の第十五代藩主であり、名門譜代大名として幕閣に連なっていた。彦根井伊家の始祖は、徳川四天王の一人として有名な井伊直政であり、その後連綿として譜代筆頭としての家格を誇っていた。



直弼が大老に就任した時は、問題山積というべき状態であったが、中でも大きな問題が二つあった。日米通商条約の締結と将軍継嗣に関する問題である。

一つ目の問題の日米修好条約について、直弼は孝明天皇の勅許を得ずに条約調印やむなしとの指示を配下の奉行に下す。これ以上、問題を先送りにすると列強による武力侵略が現実のものになる危惧があったからであり、待ったなしの状況下での決断であった。そして二つ目の将軍継嗣問題は、いわばお家騒動のようなものではあったが、これまた大変厄介なものであった。

時の将軍は第十三代の徳川家定であった。家定は幼少より病弱で言動も定かではなかったが、将軍就任後は更に病状を悪化させて政務を満足に行えなかった。その正室として島津家から篤姫が嫁いでいたが、子はなく、その後継者問題が江戸幕府における重要課題となっていた。島津斉彬・松平慶永・徳川斉昭らの有力大名は、大事に対応できる将軍を擁立すべきであるとして斉昭の実子である一橋慶喜擁立に動いた。これに対して直弼など譜代衆と大奥は、家定に血筋が近い従弟の紀伊藩主徳川慶福（とくがわよしとみ）を擁立して激しく対立した。

そのような対立騒動の最中に直弼は大老に就任したのだが、時を同じくして家定の病状が急変し重体となる。安政五年（1858年）六月、直弼は家定の意向であるとして、後継者を慶福にすると発表する。そして七月に家定が没すると、慶福は家茂と改名して第十四代将軍となったのである。二つの大問題に矢継ぎ早に断を下した直弼の胆力は、これまでの幕府要人と比べて突出したものであった。

そのような混乱を経て、家茂が新しい将軍になることになったのだが、その為には、朝廷による将軍宣下が必要であり、勅使が派遣されることになった。その勅使に選ばれたのが、侍従の高倉永祐（たかくらながさち）と陰陽寮頭の土御門晴雄であった。

将軍宣下は、江戸時代の初期においては、京都の伏見城や二条城で行われたが、中期以降になると勅使が江戸城に赴き行われるようになっていた。今回の将軍宣下も東海道を下って陸路江戸に向かうことになっていたが、晴雄はどうにも道中が心配であった。と言うのも、無勅許の日米通商条約に孝明帝が激怒し、朝廷の攘夷に懸ける想いは益々先鋭化しており、将軍継嗣問題で敗れた水戸、薩摩や、土佐、長州など勤皇派の台頭著しい藩内では、不満が膨張していた。世情が騒然とする中、これらの分子が結託すればどのような大事件に発展するか予断を許されない状

況だったからである。

將軍宣下の勅使の護衛は幕府の役目で、嚴重に実施されるだろうが、道中の宿舎内や江戸城内における身辺警護に充分目が行き届くのか晴雄は不安であった。そこで白羽の矢が立ったのが溥明というわけであった。武術に優れた溥明が、常に身辺にいてくれればこんなに心強いことはない。溥明は六位蔵人という官位を有するため正式な勅使の随員として、江戸城内にも同行できる身分であった。そのような事由から、溥明が勅使の一行に加わることを、晴雄は朝廷に強く願い出て、聞き届けられることになったのである。

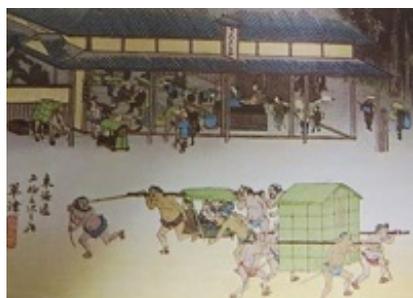
溥明の父、晟義はこれを機に、裏土御門家に伝わる式神遣いの法を溥明に授けることにした。幕府と井伊大老の権威失墜を狙った勅使襲撃計画が企てられているとの噂が、まことしやかに飛び交う状況の中、万一のことを考えると、溥明の剣術の腕前だけでは心もとないと判断したからであった。

呪法の伝授は安倍屋敷の御霊屋でなされることになった。勅使出立までの短い間に式神遣いの法を遺漏なく伝えることが出来るかどうか懸念した晟義であったが、なんと一両日もするかない内に、溥明は式神遣いの方を会得してしまったのである。溥明が、陰陽師として並はずれた資質に恵まれていることが証明されたわけで、晟義も満足であった。

溥明は会得したばかりの、式神遣いの法で、犬麻呂と牛麻呂を試みに召喚したが、幼いころから慣れ親しんできた溥明が新しい主人になるのを知った犬麻呂と牛麻呂は喜んで忠誠を誓うのであった。

安政5年（西暦1858年）11月、高倉永祐と土御門晴雄の二人を勅使とする一行は、京都を出立した。行列は総勢二百名ほどの大行列である。その前後は幕府の警護の兵が固め、行列の中央を、勅使が乗る二台の輿と雑色四人に担がれた勅書入りの大櫃が進み、その後を旗持ち、傘持ちなど諸道具や挟み箱を担う者が続いた。溥明は近衛武官の装束で騎乗した。轡取りは神埼吉蔵である。又、行列には加わっていないが、幕府伊賀組の者共が、目立たぬように周囲に配されていた。ある者は商人、又ある者は虚無僧姿などをして、怪しい動きをする者がいないか警戒に当たっていたのである。

京都を出立して最初に宿泊するのは、草津である。草津は、東海道と中山道の分岐点であり両方の宿場町を兼ねていた。その為、非常に賑わいのある街で本陣と脇本陣がそれぞれ二軒あり、その他の宿泊施設も整備されていた。勅使は、七左衛門本陣に止宿し、他の者は脇本陣などに分宿する。溥明は正式な随員であり、勅使の身辺警護役でもあったから、当然、勅使と同じ本陣に泊ることになった。旅の初日ということもあり、早めの草津宿入りであった。



溥明が自分に宛がわれた部屋で一息入れていると、使いが来て、晴雄の部屋に来るようにとの

ことであった。晴雄の部屋には、高倉卿と晴雄が上座に、下座には、二人の武家姿の者が控えていた。大柄で年配の武士は、行列最高責任者である大久保甚衛門であり、年若の者は幕府伊賀組の組頭を勤める柘植尚賢であった。大久保は大身の旗下で、道中奉行並として平時は江戸城内で全国の主要街道の整備などの任に当たっている人物である。

「寛ぎおるところ呼び立てて、ご苦労じゃが、警護について大事な話があるということだな」

晴雄は部屋に入って着座した溥明に声を掛け、次いで控えている二人の武士を見やり頷いた。「本日は旅の初日でお疲れのところ、お手間をとらせ恐縮至極に存じ上げます。これなるは、柘植尚賢と申し、道中伊賀組の宰領を勤める者に御座います」

大久保が、口上を述べ傍らの武士を紹介する。

「うむ、その方が伊賀組の頭領であるか。役目大義におじゃる」

高倉卿が鷹揚に声を掛ける。

「勅使のお二方様にはお初にお目にかかります。拙者伊賀組宰領役の柘植尚賢と申します。以後お見知り置きのほど願わしゅう存じ上げます」

年の頃は、四十前後か、瘦身ながら筋肉質で、鍛えあげた身体つきをしている。生え際の髪やもみあげが縮れているのは面擦れによるものであろう。溥明は警護の役目柄、出立前に何度か面談していて、柘植が神道無念流の達人であることも承知していた。

「うむ、道中警護のこと、伊賀組の働きを頼みにしておる。して警護上の大事な話とは、なんや」

晴雄に促されて、大久保は、柘植に話せとの仕草をする。

「しからば申し上げます。実は道中に不穏な動きありとの江戸表よりの急使が御座いました。勅使のお二方様にお知らせするべきかどうか案じましたが、万が一の備えのために、お耳に入れて置くべきと思案し、かく参じました次第にござります」

「うむ、そのようなことなれば、勅使たる我等も知っておかねばならないことであろう。詳しく申し聞かせよ」

晴雄に促されて、柘植が語ったその概要は下記のようなものであった。

“このところ全国各地で攘夷派の活動が活発だが、わけても過激なのが、水戸藩の攘夷派である。將軍継嗣問題で、井伊直弼に敗れ、藩主の徳川斉昭が江戸屋敷での謹慎を命じられたことや、勅許を得ずに米国と通商条約を締結したことなどに、藩士の多くが悲憤慷慨した。水戸藩内で激派とよばれる最も過激な者たちは、この際に、暴発、挙兵して、攘夷の先駆けになろうとの案が練られていた。具体的には開港地の横浜を焼き討ちにし、異人を追い払おうという企てであった。その挙兵にあたり、江戸に下向してくる勅使一行を襲い、公家の二人を推戴して勤皇攘夷の兵を募ろうと言う計画である。又、この計画には勅使が江戸に着かなければ、將軍宣旨ができなくなり、井伊大老に与えるダメージが大きいとの思惑もあった。水戸激派にとってはまさに一石二鳥の企てであった。”

柘植の報告を聞いていた二人の公家は、勅使一行を襲う計画と聞くと、にわかには強張り、引

き攣った表情になった。

「それは、ほんまのことであろうの？」

不安げに高倉卿が問う。

「うむそうじゃ、根も葉もない噂ばなしではないのかえ？」

一抹の期待を込めて晴雄が続ける。

「このような動向は、水戸藩内に潜入している幕府隠密のお庭番衆が、逐一知らせてまいります。決して根も葉もない噂ではありません」

柘植は確信に満ちた態度で言い切り、二人の公家とそして溥明の顔を見詰めた。

先ほど来、一言も発せず脇で控えていた溥明が言葉を挟む。

「実は水戸藩の動きについては、朝廷側の警護役として私なりに情報を集めておりました。しかし、勅使出立前は、これほどには切迫しておりませんでした。そのため、いらぬご心配をかけまいと、お二方様には申し上げませんでした。想像以上の速さで事態が煮詰まったのでございましょう」

「その通りです。我ら幕府側も勅使御一行の江戸下向に合わせて、拳兵するとは思っておりませんでした。激派が、実力で水戸政庁を押さえたことにより、事態は一気に動き始めました」

「うむ、ようわかった。容易ならぬ事態であるな」

「ほんに、ほんに、勅使を襲うなど前代未聞の恐ろしき所業じゃ」

二人の公家が口々に叫ぶ。

「拳兵計画について、具体的な動きはあるのでしょうか」

溥明の問いかけに柘植が、一步膝を勧めて返答する。

「激派の者どもは、三々五々、水戸を離れて、関東諸国に赴き密かに兵を募るなどの準備をしている模様にご座います」

柘植の言に、二人の公家は、もう戦々恐々である。

「うむ、して勅使襲撃はいつどこで行おうとしているのかの」

自分たちが襲われることが何よりも心配な様子の高倉卿が問う。

「そこまでは、幕府隠密も掴んではおりませんが、襲うとすれば、道中の難所かと」

「東海道の難所と言え、大井川の渡しか、箱根の山！」

晴雄が思わず叫ぶ。

「東海道のことは、役目柄、良く存じておりますが、大井川は難所なれど、潜み隠れる所がありません。又、襲うた後の逃げ場も無きことから、先ずもって襲うとすれば箱根山中かと。箱根山中なれば、潜む所も、逃げ道も沢山あります。」

道中奉行並の大久保の言葉に頷く二人の公家であったが、すっかり怖気付いてしまい、更なる警護体制の強化を口々に言い立てた。大久保は、勅使の意向を井伊大老に報告し、更に万全の態勢を整える旨を約束し、柘植とともに部屋を退出した。

～以下次号に続く～